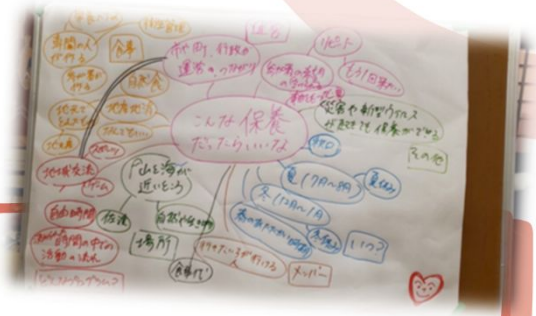
「へっついの家」に参加しての感想文



武井 真澄

佐渡「へっついの家」ボランティア送迎にかかわって

このボランティアの言い出しっぺとして反省点を上げると①佐渡は思ったよりずーっと遠く、そして広かった。新潟県だし、関越ですぐに行けると安易な気持ちでした。②こんなにもコロナが全国的に速く広がると思っていなかった。
③ボランティアの中心人物、関さんのお話だけで、実際に見て確かめてもいないのに若者にボランティアに行ってほしい、坂戸ではできないことができるからと誘いをかけてしまいました。

そのため直前まで、行こうか、やめようかとみんなですったもんだして、最後は女性３人が「ぜひ参加したい！」と言ってくれたのでこのボランティアが実現しました。なんとかPCR検査キットも手に入れ、送迎の２人はワクチン接種も完了、コロナ禍ということで車での送迎となりました。

早朝に出発したのに到着したのは夕方近く。私たちはかなり離れた国民宿舎に宿泊、翌日午前中に「へっついの家」に伺い、関さんの思いを聴きながら「へっついの家」を見せていただきました。私たちの「郡山の子どもたちと遊ぶ会」は郡山から招いた小学５，６年生２０～３０人を対象に、林間学校のように次から次へと行事を用意し、とにかく楽しく４泊５日を過ごすというスタンスです。これに対して「へっついの家」は、のんびりと休養し、身体の免疫力を上げ、自分たちで保養の意味を考えるというスタンス、だからずーっと長く持続させていくことが大切だとのことでした。
へっつい（かまど）で自分たちの田んぼで育てたコメを炊く、素敵ですよね。でも、もう便利な生活に慣れ切った私には、毎日かまどでゴハンの生活には戻れない気がしました。しかし、あらゆるところに生活の知恵や自分の身体を守る、放射能から自分を守るというスタンスがうかがえて、とっても良かったです。
「へっついの家」の大きな木のツリーハウスは、子どもたちにワクワクするような気持ちを持ってもらえるようで、自分が子どもだったら夏休み中ここにいたいかもと思ってしまいました。
ばっちり酔い止めを飲んでから昼過ぎのフェリーに乗り、無事海を渡り、新潟に一泊し、坂戸に戻りました。
坂戸での用事をこなして翌日再び新潟へ。新潟港で４人の若者を出迎え。ちょっと疲れていましたがキラキラと輝いていて「行ってよかった」との感想を聞いて私たちもとてもうれしくなりました。
今回は会計として、コロナ禍ということでいろいろ出費が多くなりましたが生協パルシステム埼玉さんの助成には、本当に感謝です。ビジネスホテル代も、お盆の時期ということでいつもより高く、また、バスや新幹線も使用せず、ということで送迎も疲れましたが、若者たちの笑顔でふっとびました。

学生ボランティア
木伏 彩佳

「新しい種を植えた場所」

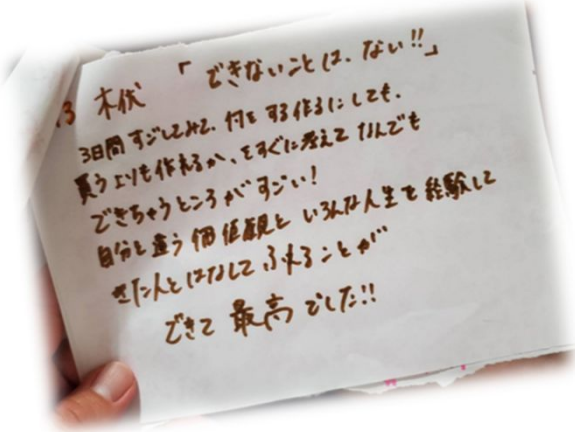
佐渡ヶ島のへっついの家に到着するまで、数々の困難がありました。

私は、自分軸で生きていると言うよりは、後悔したNPO団体のとあるプログラムに学生生活の最後を捧げると言っても過言ではないくらい他人軸で生きていたと思います。だから、へっついの家に行くのはあまり楽しみと言うよりこんなことをしてる場合なのかという複雑な心情でした。

でも、みんな元気で明るくて前向きに生きていて少しづつ私の気持ちも軽くなって自分のことと向き合う時間になっていきました。きっと、私ってこれからどうしていきたいんだろうとか就職や考えるべきことに対してプログラムを理由に放棄していたんだと思う。でも、みんなと話したり自然と触れ合ってとても私にとって大切な場所になりました。

ギターの演奏を聞いた時、泣きました。みんな何かしらの困難を乗り越えてきて、明るく生きて強いんだなって私もそんな大人になりたいと思いました。佐渡ヶ島という場所で会えた人達は、私にとって別の居場に感じられました。

素敵な繋がりと空間をありがとうございました。



学生ボランティア
井出 捺稀

「新しい刺激を見つけた時間」

NPO法人ライフケアさんがさまざまな活動を行われている中で今回、夏の保養キャンプである『へっついの家　保養キャンプ』にスタッフとしてこの活動をサポートする立場を経験させていただきました。

新潟県佐渡島にある築100年の古民家で、毎年子どもからお年寄りまでまるで大家族のような共同生活を過ごす活動です。今年は新型コロナウイルスの関係で予定の人数よりも少なく、私たちも含め10人で一番の年下が高校１年生という不安があるものでした。

佐渡島に着き、へっついの家に着くとその不安を取り除くことができました。埼玉から来た私たちを温かく迎え入れてくださり、美味しい料理に自然を感じられる環境、たくさんの優しい声かけをしてくれる皆さんのおかげでした。

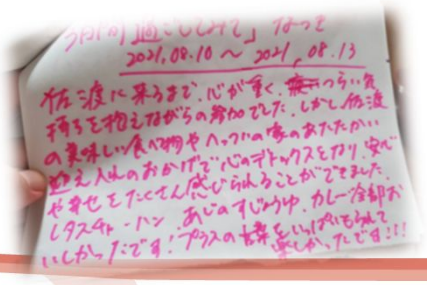
へっついの家の一日はとても濃く、あっという間で毎日疲れて爆睡してしまう、そんな時間でした。朝は６時に起床し、掃除や朝ごはんの準備をする、とても理想的な一日の始まりでした。眠い目をこすりながら台所に向かうとみんなから「おはよう」と言ってもらえました。久しぶりに誰かにおはようと言ったので少し嬉しかったのを覚えています。

普段簡単な料理しか作らない私だったので、ここで食べたご飯は新鮮で誰かに作ってもらう、また一緒に楽しみながら作るご飯は世界一美味しく感じました。美味しかったご飯は家に帰った後も思い出しながら作っています。しかし、へっついの家で食べたご飯の美味しさを超えることはできません。みんなで一緒に言ういただきますや楽しく会話しながら食べるご飯、「おかわり食べる？」と言ってくれることは忘れていた何かを思い出させてくれたように感じました。
田んぼの草むしりやじゃがいも堀り、薪割りや風呂焚きなどでたくさんの汗をかいてから食べるご飯はより一層美味しかったです。私たちが当たり前に食べる食事も感謝していただくことの大切さを実感しました。

今回の活動で印象に残ったことはワークショップです。「こんな保養があったらいいな」というテーマで2チームに分かれて話し合いをしました。私は現在城西大学の現代政策学部の3年生で現在、地域活性の分野を勉強しています。
私は進行役や話し合いの軌道修正にあたるファシリテーターを務めました。ワークショップは大いに盛り上がり熱い話し合いができました。これは長い間保養活動に参加している高校生の存在やそれに携わっている大人たちがより良いものを創り出すには何が必要になっているのかぶつけ、より深く話し合えたからだと思います。その時間は私にとってとても有意義な時間でした。

この『へっついの家　保養キかャンプ』に参加してみて人の温かさに人のつながりの大切さを学び、自然の恵みに感謝すること、日常では感じることができない非日常的な生活の中でさまざまな経験し大きく成長することができました。保養はからだを休ませて健康を養うことを意味しますが、この活動でそれが身をもって実感することができました。今年21歳になる私ですが、多くのことを学び成長できたのでへっついの家に参加する皆さんはどんな世界を見ることができるのかをまた来年も見てみたいと感じました。

保養を通してこれから私はどんな人にも平等に素晴らしい生活が送れるために何ができるのかを見つけ出していきたいです。最後にはなりますが、今回このような素敵な場所を提供してくださった関さんをはじめ、関わってくださった全ての方々に感謝しています。
ありがとうございました。

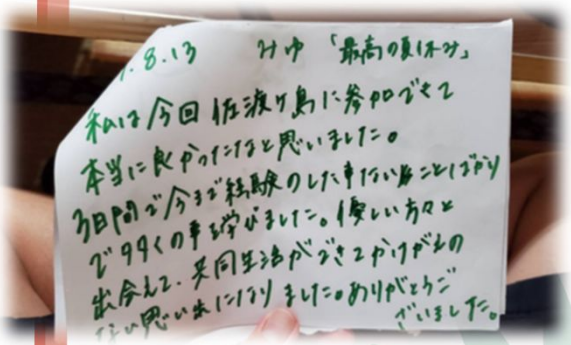


学生ボランティア
深谷 美結

「新しい心に気づけた日々」

今回私は佐渡島にボランティアとして行くことができて本当によかったです。
1ヶ月以上経った今でもとてもそれを感じています。へっついの家ではたくさんの出会いと学びの多い時間を過ごすことができました。それはへっついの家の皆さんが優しく迎えてくださり、たくさんの事を教えてくださったおかげだと思います。

今回、へっついの家の歴史や、近所の方との関わり、何でもかんでも機械に頼らず自ら作って使うこと、自然、そして自由の大切さ学びました。正直、最初はどんなボランティアかはっきりとしたイメージもつかず、不安ばかりでした。ですが、いざ行くとへっついの家の皆さんが優しく迎え入れてくださったおかげで私は心がほっとしました。へっついの家で過ごした中で心に残っていることは佐渡島の海の綺麗さと、ご飯です。海は綺麗で、魚も泳いでおり、とても驚きました。そして、へっついの家で食べるご飯がとても美味しすぎて、たくさん頂きました。そして、美味しく食べるだけでなく、一緒にご飯を作って大人数で食べることは本当に幸せだなと感じました。



自然の中で自由に子ども達のやりたい事を考えて一から作ったりするという環境や考えが、私はすごく好きだなと気づきました。自分自身も自然で過ごすことがやはり合っていると言うことに気づきました。そしてその事が新しい発見となりました。携帯やSNSに囚われず、自分自身の体や、心で生活することがこんなにも私にあっていたのだと気づきました。
将来自然の多いところに住みたいです。

私はアットホームなへっついの家がとても大好きです。薪割りや田んぼ体験などやったことのない事を体験することができ、参加させてもらことができて幸せです。
そしてへっついの家の皆さんとまたお会いしたいと強く思っています。とても貴重な体験をさせて頂きありがとうございました。最高な思い出です。

ボランティア
山口 祐

「新しい出会いと故郷」

絶対にうまくいくわけがない。
今回参加する前日まで、そうやって考えていました。与えられた情報量の少なさ、初めて行く場所（おまけに離島）、初めて会うスタッフ、一緒に行く学生達を無事に帰えさなきゃいけないと言う責任、親しき仲間が亡くなると言う心が張り裂けそうなほど悲しかった出来事、どれを考えてもなかなかプラス思考になりきれなかったと言うのが本音でした。無事に帰ってきた今だから言えるんだけどね(笑)
そんなこんなでたどり着いた佐渡島inへっついの家は築100年を超える古民家を修繕しながら使っているということで、想像を超えるほどの佇まいでした。本当にここで生活できるの？？？って何度も感じたけど、住めば都とはこのことか！と思うほど心地の良い空間でした。
ざっくり言うと、親父の実家に帰ってきたかのような、ジブリで例えるとトトロの世界に入り込んだようなそんな感じです。
着いた初日は、へっついの家で行っている保養の説明及び施設の見学、その後夕飯を食べながらお互い自己紹介をしてからミーティングを行いました。今思い返してみると、ここまでは自分も含めてまだ緊張していた気がします。二日目以降からは、保養に来た家族や子ども達が普段やることを経験させてもらいました。朝6時に起床してからの掃除とご飯作り、魚が肉眼で見える程キレイな海での海水浴、毎食自分たちで調理しないと食べるものがないのでその食材の買い出し、自分たちが入るお風呂を薪で沸かさなきゃいけないので薪割りからの火起こし、へっついの家のスタッフが管理している水田の草取り、畑での芋堀、現地散策として行った坑内温度10℃で風邪ひくかと思った金山、初めてナマの朱鷺をみて感動したトキ保護センター、一目見て凄さがわかったマンドリンのでのゲリラ？ライブ、毎晩ミーティング終わりに輪になって歌った「世界中のこどもたちが」。どれも印象に残ってるけど、火起こしでなかなか火がつかなくて、めちゃめちゃ目が痛かったときに隣にいた子どもがみせた悪い笑顔と、最終日前夜エレクトーンの音色と一緒に歌った「世界中のこどもたちが」は絶対に忘れることはないと思いました。
最後に、今やっていることをなんとか事業化させたいと言う熱い想いと、迷惑をかけてしまったときの苦笑いが印象的だったジョニー、ダジャレばかり言ってるけど、みんなの緊張を一生懸命ほぐしてくれたへっついのバリスタたぁーちゃん、日本全国を飛び回りながら多岐にわたる仕事をしている傍ら、へっついの家では炎の料理人を勤めるすみちゃん、最終日前日夜、みんなの前で私のことを「組長」と名づけ、日本酒を片手に「しゃべり過ぎないのが男や」と優しい笑顔で語ってくれた関西出身のドイさん、普段は物静かだけど、金山に行くとき車内でいろいろ話をしたへっついの家専属の棟梁りゅーじ、出会って3日目で正体を現したミスターいたづらっ子で笑顔がかわいいけどたまに毒舌なハヤト。みんなが暖かく迎えてくれたからこそ、とても楽しくて思い出に残る研修になりました。もちろん、たくさんサポートしてくれた武井夫妻、一緒に参加してくれたあやか・みゆ・なつきにも心から感謝しています。また必ず、へっついの家に帰ります。それまでいろいろと頑張らないと。その時が来ることを信じて。本当に本当に、ありがとうございました。

この感想文を書いていて、頭の中を整理したり冷静に考えたりして思ったことがある。あの日、東日本大震災が起きていなければ、その時福島原発が事故を起こすことがなければ、自分が所属する「郡山の子どもたちと遊ぶ会」や今回参加した「へっついの家」は存在しなかったんだなと。自分自身が被災したわけではないから実際被災された人の想いを100%わかることはできないけれど、家族や仲間が亡くなったり今でも行方不明だったり、生きていても知らぬ間に多くの放射能を浴びてしまったり、帰る家、土地がなくなったり。数多くの人たちが数多くの大切なモノを失うことなんて無い方がいいに決まっている。いや、絶対にあってはならない。そんな中、出会った人たちにはとても感謝している。それが一期一会になろうとも。全ての人たちが、心から笑顔で過ごせる日々が訪れますように。

郡山の子どもたちと遊ぶ会　代表　花田　勝夫

連絡先
　電話（固定）　049-289-2527（FAX兼用）
　　（携帯）　090-9854-5175
　メール　koriyama-sakado@sakado-gr.org

　埼玉県坂戸市北大塚40　武井　誠